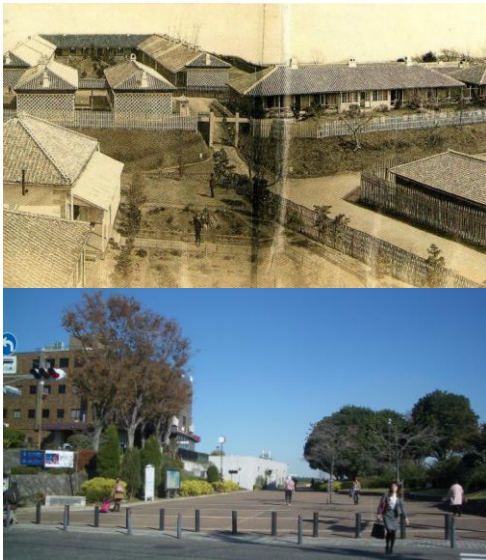


山手町115番

ー イギリス海軍病院・ハマの名物医師、大震災に驚る

◎ 谷戸坂上・イギリス海軍病院



明治初期のイギリス海軍病院(上)と
現在の「港の見える丘公園」入口(下)

谷戸坂は重い坂だ。元町から山手に向かう多くの谷坂と違い、谷戸坂は尾根沿いに長く続く。ここは居留地時代、ブラフに住みバンドで働く外

国人たちが、日毎行き来

する主要な幹線だった。

谷戸坂上の海側、現在の「港の見える丘公園」が明治期にイギリス海軍病院のあった場所である。明治29(1896)年10月22日、悲劇の主人公、W.R.H.カリュエが搬送されその日にヒ素中毒で死亡した病院である。

この事件の謎の一つが、検屍裁判で詳らかなるように、主治医のホィラーが死の一週間前からカリュエを頻繁に診察していたにも拘わらず、何故、妻イーデスの盛られたヒ素の薬物中毒に気付かなかったのか、ということだ。この素朴な疑問を解くために、ホィラー医師の足跡を少し辿ってみることにしよう。

◎ 熱血海軍医師エドウィン・ホィラー

ホィラーの来日は明治3(1870)年1月に遡る。弱冠29歳、才気溢れる若手医師であった。酒豪と熱血漢の多いことで知られるアイルランド出身の彼は、海軍軍医として来日し、当初はイギリス公使館付医師となった。前回、ラウダー弁護士についてご紹介したように、幕末から明治初期にかけては、攘夷派の志士による外国人の殺傷が相次いだ時代である。ラウダーも当時、公使館のあった高輪東禅寺の襲撃事件でピストルで応戦した経験を持つが、来日当初のホィラーの大仕事もそうした事件の負傷者の治療にあたることだった。

イギリス人ジャーナリスト、J.R.ブラックの記した『ヤング・ジャパン』には、明治4年、新潟で志士に襲われたイギリス人お雇い教師キングの治療にあたるため、早馬を飛ばして84時間かけて駆け付けた、という武勇伝が紹介されている。カリュエ事件当時55歳のホィラーは、こうした来日当初の伝説に彩られ、

居留地の外国人たちから「ジュディ」という愛称で親しまれる好々爺の名物医師であった。

◎ 医師として、在日イギリス人として

ホィラーは、公使館付医師の職とともに、日本初の鉄道建設に多くのイギリス人技術者が招聘されると、工部省の鉄道医をも兼務した。国策のために短い工期による過酷な労働を強いられ、30歳の若さで早世した建築師長E.モレルを筆頭に、技師達にここでも情熱をもって温かい医療の手を差し延べる役目を担った。

その後、日本海軍軍医の育ての親とも称されるW.アンダーソンと共に海軍省付の軍医教官も務めたが、明治9(1876)年には公職を辞し、ブラフ75番、後に終生を過ごすことになった97番で開業医となる。

しかし当時、ブラフの外国人居留民をとりまく医療環境は決して良好ではなかった。開港直後、フランス、オランダ、イギリス、アメリカが相次いで居留地に海軍病院を建設したが、これはあくまで軍人向け施設であり、居留民一般に開放されたものではなかった。

こうした背景から設立されたのが「山手ゼネラル病院」(「各国病院」「一般病院」等の訳名がある)だった。病院は設立したものの、結局は駐屯軍を置かなかったため、経営困難に陥っていた、ブラフ82番のオランダ海軍病院を、有志が買収して居留民のための総合病院としようという動きであった。

ホィラーは明治11(1878)年にこのゼネラル病院の医師となり一般居留民の治療にあたることになった。

山手ゼネラル病院は決して邦人を排したのものではなかったものの、高額な医療費を払って治療に訪れる日本人の姿は多くは見られなかった。

一方で、開港後に採り入れられた先端的な英米医学を邦人医療にも施そうとする動きは、本シリーズ⑤で紹介した丸善創業者、早矢仕有的にも見られたが、横濱商人の有志が資金を出し合って、明治7(1874)年に野毛山に建設したのが「十全病院」であった。この病院は運営自体に横濱商人が参画する「市中公立病院」であり、貧民の無料診療を行うなど、社会福祉事業としても先駆的なものであったと言われている。

この十全病院の初代医師がアメリカ人D.B.シモンズであった。シモンズが退職した明治13(1880)年と、明治16(1883)年の二度に亘って、ホィラーもこの十全病院に招かれ勤務した。明治20(1887)年に十全病院を退職すると、ホィラーは改めてゼネラル病院の医師となり、後進となる日本人医師の育成に携わる。

こうしてホィラーは、横濱・日本の居留民および邦人医療の草創期に大きな足跡を残すことになった。だが、医療後進国日本に在って医療現場に身を置き続け、後進指導の道を選択することは、同時に本国イギリスの先端医療から取り残されていくことを意味する。情報伝達手段の限られていた当時を思うと、文献を紐解

くこと位しか、先端技術を習得する術はホィラーには残されていなかったに違いない。事実、明治初期にお雇い医師として来日した多くの優秀な外国人医師達は、日本での医療現場を数年で切り上げて本国に帰国する道を選んでいる。

◎ 横濱外国人居留地の名士として

十全病院で働き始める前後から、ホィラーは横濱に骨を埋める覚悟を決めたのか、地域社会への貢献活動に手を広げていく。クライスト・チャーチやヴィクトリア・パブリックスクールの委員を手始めに、競馬好きが嵩じて日本レースクラブ（根岸競馬場）の副会長を15年も続け、また馬主ともなった。スポーツ愛好家であり、ヨットクラブや横濱クリケット運動競技クラブ(YCAC)の会長も務めた。

ホィラー夫人であるマリーも、明治11(1878)年に設立された日本最初のテニスクラブ「レディース・ローンテニス・アンド・クローケー・クラブ」の初代会長を務めたことで歴史にその名を留めている。

さて、こうして明治29(1896)年10月を迎える。体調不良を訴えた、ブラフ169番にあるカリューの家にホィラーが往診に訪れたのは15日。肝炎に若干の胆嚢炎の徴候がある、というのがホィラーの診断であった。二、三日ユナイテッド・クラブ支配人の仕事を休んで静養すれば良くなる、という指示だった。

17日から18日にかけて少し持ち直したものの19日夜には胃痛・腹痛と激しい喉の渇きを訴える。20日、イギリス海軍病院のトッド医師にも診察を依頼し、肝臓の委縮を見るが胃痛・腹痛との因果関係が掴めず、二人は病状に不審を持つ。困惑した両医師は東京の著名なベルツ博士に往診依頼の電報まで打つが、結局、多忙を極めたベルツの往診は実現しない。

21日には病状は急激に悪化。22日朝、カリュー家の家庭教師ジェイコブにヒ素溶液の常用を耳打ちされて始めて、ホィラーは慌ててイギリス海軍病院に入院させるが、その夕刻にカリューは還らぬ人となった。

◎ 関東大震災の災禍の中で

カリューにとって、その主治医が居留地の名士ホィラー医師であったことが果して幸運であったかどうか。

この閉ざれた「リトル・ヴィクトリア」横濱外国人居留地で、医療技術の研鑽のための帰国を断念し、善意に支えられた地域貢献に身を委ねていたホィラー医師にとって、妻イーデスがカリューに致死量のヒ素溶液を飲ませることなど想像も及ばなかったに相違ない。

一方で、イギリス帝国主義の狭間の中、あばずれ者として東南アジアから横濱に流れ着いたカリューが、別の医師の処方で、以前から淋病の治療薬としてヒ素溶液を常用していたという推察ができなかったことに対しては、十分な医療知識が欠落していた誹りを免れ得ないであろう。明治初期のあの熱血漢医師ホィラーが、その職業倫理の故に、このカリュー事件で著しく自責の念に駆られたことは想像には難くはない。

そしてそれから、27年経った、大正(1923)年9月1日土曜日の正午前へと時間は飛ぶ。

その日、85歳のジュディは朝の診療を終えると、バンドの競売商をしていた親友のJ.W.ホールとの長年の習慣で、ホールの死後も友人のトム・アベイと競売場で一杯のシェリー酒を楽しんでいた。そして、突然の天地を揺るがす大地震に慌てて競売場を飛び出した二人は、共に家族の待つブラフへと足を向けた。

二人は重い足取りで、しかし急ぎながら谷戸坂を上っていく。そして、ブラフ一帯を被った震災による火災の炎風にまかれ、二人は敢え無く命を落としてしまうのである。老いて尚、死の間際まで医師を貫き通したホィラーが目指していたのは、あの谷戸坂上のイギリス海軍病院、であったのかもしれない。

[参考資料]

「横浜・山手の出来事」(徳岡孝夫／双葉文庫)

「幕末・明治の外国人医師たち」(小玉順三／大空社)

「横浜山手外人墓地」(生出恵哉／暁印書館)

「横浜もののはじめ考」(横浜開港資料館)

<ポンチ絵の中のホイラー医師>



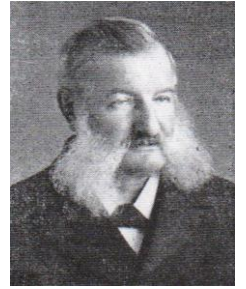
ワーグマン描く
「ホイラー先生」

昨年夏、神奈川県立歴史博物館で開催された『ワーグマンが見た海—洋の東西を結んだ画家—』展は実に奥深いワーグマン像を浮彫りにしてくれた。正規の美術教育を受けずに民俗学的関心から「イラストレーティッド・ロンドン・ニュース」紙の特派員として1861(文久元)年の幕末混乱期の横濱に飛び込み、同紙に挿画を送り続ける。

そして、その経営不振とともに活動の場所を「ジャパン・パンチ」紙に移し、いわゆる「ポンチ絵」の創始者として知られるようになる。

ワーグマンが描いた日本の風俗、文化、慣習は明治期以降の近代化によって喪われた旧き佳き時代の日本を活写している。そして余り知られていないことだが、五姓田義松と高橋由一という、やはり民俗学的な日本の伝統美を追求した二人の洋画家を育てた師でもあった。

そんなワーグマンが描く、ホイラー医師のポンチ絵は、実にその人柄を捉えているといえよう。日本を、そして横濱を愛し 30 年も住み続けたワーグマンは、結果的に 53 年を過ごして横濱に骨を埋めたこのホイラー医師に、自分と同じ匂いを嗅ぎ取っていたのかもしれない。ホイラーが連れているのは愛馬の中国産ポニー「タイフーン号」であろうか。



ホイラー医師の肖像写真